
黒の組織との対決？！ 知られてしまった正体・・・

桔梗

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織との対決？！ 知られてしまつた正体・・・

【Zコード】

N1676W

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

一ひよんな事から始まつた・・・。恐怖の始まり。

恐れていた事が起きてしまつた・・・。工藤 新一が生きている事が奴らに・・・。

この、絶対絶命の状況下の中、コナンはどうする…？

1、突然の恐怖（前書き）

第一作です。第一作も更新していますが、こちらも宜しくお願いします。

1、突然の恐怖

「 話はひよんな事から始まつた・・・。

「 これは、ある日の事・・・。

「 毛利探偵事務所」

ある依頼人が来ていた。

「ストーカーですか？」

小五郎が尋ねた。

「はい。なんか狙われてる気がして・・・。怖くて・・・」

依頼人の女性が、震えていた。

「（ストーカー被害か・・・。これは、この人に発信機をつけてこの人の位置を常に確認した方が

良さそうだな・・・。）」

「ナンは考えた。

「おねーさん。このバグいいねえ！」

「ナソはいつものように、話をじて、相手の視線を逸らし、発信機と盗聴器を取り付けた。

「ありがと。」

女性は、気まずくお礼を言った。

「それから、依頼の事を聞き、俺達は捜査をしたんだ……まさか、その狙ってる奴が奴ら

なんて思わなくて……あの時に取り付けた発信機と盗聴器はジンに見つかっちゃったんだ。

－その女性の部屋－

「アニキ、それは何ですかい？」

ウオツカが聞いた。

「ここれは、発信機と盗聴器だ……。」

ジンは答えた。

「なぜ、そんな物が？」

「ああ。とにかく調べてみれば分かる事だ。」

「フフッ。俺はゾクゾクしてくるぜ……」いつを仕掛けた奴を殺る事が出来るんだからな……」「

— 同時刻 毛利探偵事務所 —

「…………ずらかるぞ……グシュ」

盗聴器から潰される前に聞こえた音……一瞬だけ聞こえたあの声。

「（……まさか……ジン！あれには、俺の指紋が……まづい……）のままだと……俺以外

にも危害が……それだけは……絶対に……蘭達はどうする……時間がない！一刻も早く

FBI・ジョディ先生に……俺に関わった奴らを……」

— ハナンは一刻を争う現状に一気に引きずり込まれた……。そ

う、この時から、生死を賭けた

戦いはもう、始まってしまったのだった。コナンは、次の日になる前に、ジョディ先生に事情を

全て話し、服部、和葉には東京に急きよ来るよう言い、両親には、外国の両親が居る所に、

FBIが護衛をつけてくれる事になり、東京にいる皆は、適当な嘘を蘭達にはついたが、

どうにかFBIに保護してもらつた。ただ一人・・・納得してくれない人物を除いて・・・。

1、突然の恐怖（後書き）

とりあえず、コナンに深く関わった人はまとめてしました。
すみません。

2、指紋照合（前書き）

桔梗ですか。一話をお楽しみ下さい。

2、指紋照合

次の日になり、コナンは自分に深く関わったみんなをFBIに保護してもらう作業は完了

した。コナンは黒の組織の事を考えていた。

—FBIの中—

「ところで、周りの人間は大丈夫だ。」

「ナンは一安心した。突然、後ろから声がした。

「あなた、自分は何をするつもり?」

灰原は、厳しい表情を浮かべながら、コナンを見た。

「狙われているのは俺だ。俺がここにいたら、あいつらにも、迷惑をかける。お前にもな。

だから・・・」

「ここにはいられないとか言つつもり?」

「・・・。」

「大体、なんでいきなりジン達があなたを狙つのよ? から説明しなさいよ。」

「ナンは、まだ誰にも、この事は話していないかったのだ。

「・・・事務所に依頼人がきてさ・・・ストーカー被害に遭つてたらしいんだよ。それで、その

ストーカーが奴らで・・・彼女は殺されたよ。」

「それで、なんであなたが標的にされなきやならないのよ?」

「渡つちまつたんだよ・・・奴らに俺の指紋がべつたりついた発信機と盗聴器が・・・」

「えつ・・・・」

灰原は血の気が引いた。

「だから、俺に関わった蘭や博士、服部、和葉、子供たち、お前もFBIに保護して

もうつたんだ。」

灰原は震えていた。

「お前は、ここにいるよ?じゃあな・・・」

「ナンは歩いつとした。」

「駄目よ・・・やめなさい!あなたもここになさい!行かないで・・・お願い!」

「悪い・・・灰原・・・プシュツ・・・」

「ナンは灰原に麻酔針を打ち込んだ。」

「工藤君・・・だめ」

灰原は倒れた。コナンは、灰原を椅子に座らせた。

「悪い・・・灰原。オメーらを巻き込む訳にはいかねーんだ・・・」

「

—その後、コナンは黒の組織に備えた準備をし、FBIの人々に、
灰原が出てきたら、

止めるように、言い、FBIのジョーティ先生と行動をともにした。

—黒の組織 アジト 研究室—

「コイツの指紋を調べろ

ジンは部下に命令した。

「分かりました。」

「アニキ、楽しみですねえ。」

ウォッカがジンを見て、言った。

「……。」

一部下は、調べ終わったので、ジンとウォッカに話した。

「どうだつたんだ？」

「はい。この指紋の人物は・・・工藤 新一です。」

「何！？そのガキは・・・アニキがばらしたはず・・・」

ウォッカは言った。

「フツ・・・面白い・・・」

ジンは笑った。

「ですが、組織のデータベースでは死亡確認になっています。」

部下は言った。

「大方、シェリーが書き換えたつて所だろつ。あの女は組織に反抗していたしな。」

「それで、毛利小五郎があの女を殺す前に会っている事が確認できました。」

部下は言った。

「工藤新一の消息を調べる。俺は、思い当たる節を当たつてくる。」

「分かりました。」

——「工藤新一がまさか生きていたとはな……クククッ。これから面白くなりそうだな。」

おやじりぐ、シヒリーも工藤新一といふ。」

ジンは不気味な笑みを浮かべていた……。

2、指紋照合（後書き）

ばれてしましました・・・。どうする新一！次話を楽しみに！

3、ベルモットの微笑み（前書き）

かなり、更新が出来ず、誠に申し訳ありません。
でも、読んで頂けるとうれしいです。
感想も、待つてます。

3、ベルモットの微笑み

ジンとウォッカは、ポルシェ356Aで、探しを入れていた。数分後、ウォッカの携帯電話が

鳴った。ウォッカはその鳴り響く携帯電話を手に取り、通話ボタンを押し、耳に当てた。

「おう。どうした？なんか進展があつたか？」

ウォッカは、部下に問いかけた。

—黒の組織 アジト 研究室—

「はい。工藤新一の事について調べたのですが、毛利小五郎が有名になつたのは、工藤新一

が失踪した時とほとんど一致しました。それまでは、毛利小五郎は全く有名ではありません

でした。あと今、FBIが動いているようです。」

部下は調べた結果をウォッカに話した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「そうか。了解。また新たな情報を見つけたら電話しろ。 - ピッ。

」

ウォッカは、携帯電話をコードにしました。

「何か分かつたのか。」

ジンは、タバコを吸いながら、電話の内容をウォッカに聞いた。

「毛利小五郎が有名になつた時期と工藤新一が失踪した時期は一致するみたいで、

毛利小五郎は工藤新一が失踪した直後に、いきなり有名になつたらしいですぜ。」

ウォッカはジンに電話の内容を伝えた。

「コン、コン。

誰かが、車の窓をノックした。

「ベルモット。」

ジンは、そつと窓を開けた。

「ジンっ、今日まだじうじたのかしら？なぜか、ボスにも知らせないで・・・」

ベルモットは、バイクに乗りながら、ジンに質問した。

「工藤新一を探してるんだ。」

ベルモットは、思つても見なかつた事が起きていたので、顔には出していくが、びっくり

した。

「工藤新一は死んだんじゃなかつたの？」

ベルモットは知らないふりをして、ジンに問いかけた。

「ああ。死んだと思ったがな。生きている。昨日消したあの女のバッグについてたんだ。

工藤新一の指紋のついた発信機と盗聴器がな。」

ベルモットは、目を見開いた。ジンには、ヘルメットで見られなかつた。

「そう。でも大丈夫？ボスにあなたが勝手な行動している事がばれたりでもしたら・・・」

ジンがベルモットの言葉を遮った。

「フン・・・早く終わらせればいい話だ。」

ジンは、笑いを浮かべた。

「そり。まあ幸運を祈ってるわ・・・」

ベルモットは、バイクのスピードを上げ、ジンの車からは見えな

くなつた。

ーブオーーーン・・・・・

ベルモットは、高速をバイクで走っていた。

「（早く終わらせる事ができるかしら・・・。私の愛しのシルバーブレット君を・・・・

もしかしたら・・・ジン・・あなたでさえも、その冷血感を保つては居られないかも・・・

フフフッ・・・楽しみだわ・・・」

ベルモットは、バイクに乗りながら、そう考えていた。

3、ベルモットの微笑み（後書き）

今日更新できたらしますが、できなかつたら「めんなさい」・・・
次話もお楽しみに

4、現れたベルモット（前書き）

おはようございます。桔梗ですっ！黒の組織の小説は考えるのは頭つかいますね。
でも、頑張りますので、見て頂けるとうれしいです。

4、現れたベルモット

「コナンはジョディと行動していたが、ジョディには一言も自分が狙われる事を話して

いない。というか、話す事が出来ないのだ。話してしまえば、工藤新一ということだが、

ほとんどばれる事になる。そう考えたコナンは、危険だが、一人で行動する事にした。

~~~~~

ジョディとコナンは、交差点の所にいた。コナンは話を切り出した。

「ジョディ先生。」

ジョディはいきなり、コナンに話しかけられたので、少々びっくりした様子だった。

「ん？なにかしら？」

ジョディは、真剣な顔をしたコナンの方を向いて、聞き返した。

「『』めん。僕ちょっと別行動するねーなんか分かつたら教えてねー」

「コナンは、あまり深く聞かれたくななく笑顔でジョディの話を聞く間もなく、走った。

「ちよつと……。coolkid!」

ジョディは、笑顔で走るコナンの背中を見ながら、ジョディはなにか違和感を感じたが

特に、強くは気にしなかった。ジョディはほとりあえず、車に乗り込んだ。

一方、コナンはジョディから、随分離れたので、走るのを止めた。

「これから、どうするか……。」

そう、頭で考えていたら、コナンは後ろから誰かの気配がした。  
近づいて来る気配に

「コナンは、警戒し時計型麻酔銃を構えていた。

「そんなに、警戒しないでよ。こおろぐう。」

その気配の正体は、ベルモットだった。

「ベルモット！・・・」

「コナンは、少し驚いたが、すぐに平静を取り戻した。

「コナンは、少しうまくやった。教えてあげるわ。今組織がなにをしているか。」

ベルモットは、微笑みながら情報を提供すると言つてきただ。

コナンは、予想外の

ベルモットの一言に真剣だった。

「でも・・・いいのか？そんな事してる事、奴らに見つかったら・  
・」

コナンは、疑問をもちながら、少し心配していた。

「大丈夫よ。私は女優よ？あなたが黙つてさえくれたら、やり過  
ごす事は出来るわ。」

「ベルモットはものすごく余裕と言いたいような口調で、言い返  
した。コナンは、了承を

した後、ベルモットが、教えてくれる情報を聞く準備をした。そ  
の後、ベルモットはコナン

に話し始めた・・・

#### 4、現れたベルモット（後書き）

ベルモットが、危険を冒してまで、情報を教えてくれる優しさ・・・

次話は、ベルモットの話の続きです。

## 5、情報（前書き）

どうもー！桔梗です。

10月という事で「親友との間に起る悲劇」の後に書くつもりだったのですが、

書かせていただきました。かなり久しぶりですが、読んでいただけると幸いです。

## 5、情報

ベルモットは、組織が今何をしてるかを話し始めた。

「・・・もうすでに、組織は貴方の盗聴器と発信機は調べられて探しているわ。」

コナンは、想像した答えが返ってきていた。

「工藤新一としての貴方をね。」

コナンは、少し目を見開いていた。そして、口を開いた。

「戸川コナンは、まだばれてはいないのか？」

コナンは、ベルモットに聞いた。

「ええ。でも、時間の問題よ。辛うじて、ショリーがAPT-X 869のデータを組織に教えていないけど、ショリーは、裏切り者だから工藤新一のデータを書き換えたって事は、

ばれているしね。それに、毛利小五郎が有名になつた日と上藤新一の失踪が同時期だつて

事は、もづばれてるわよ。」

ベルモットの言つた事は、コナンはこいつなつてゐる事を承知して  
いた。

「もう一つ、教えてあげる。今回の上藤新一を殺すというのは、ジンが、単独で仲間を連れてやつてゐる事よ。だから、ジンは、冷静さを失いかけてゐるわ。」

「そりながら・・・」

「コナンは、勝算を考えていた。ベルモットは少し笑うと、バイクに乗り込んだ。

「私は、そろそろ行くわ。幸運を祈つておるわ・・・」

「ぐふぐふ・・・」

バイクは発進し、コナンの前は誰もいなくなつた。

「（そりながら）やはり俺が上藤新一とばれるのは時間の問題だな・・・。」

「作戦を立てないとな・・・」

コナンは、頭の中で作戦を立てていた。

## 5、情報（後書き）

こんな感じかなと思い、ベルモットを書かせて頂きました。  
次話も、お楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1676w/>

---

黒の組織との対決?! 知られてしまった正体・・・

2011年10月10日06時20分発行